

十二歳を過ぎた年に於て、悪人等が大王毗羅都思即ち pilatos (Syr.) pilātūs (Sogd.) pilāts (Pahl.) に告げて遂に殺すに至つたと記してゐる。勿論此の年の數は對觀福音書の中などには見えず、たゞ誰も知る通り路加傳^{三ノ}に「時にイエスおほよそ三十にして福音を宣始む」とあるのみである。前文140行に「彌師訶年十二、及只年卅二已上、求所有惡業衆生、遣廻向好業善道」とあるのは、文義明かではないが、十二は前に述べた通りであるから、多分十二歳を過ぎた後に洗禮を受けて、その後三十二歳已上に及んで、有らゆる惡業の衆を求めて好業善道に廻向せしめたとの意であらう。兎も角當時の景教士がイエスの生涯について、かく生壽三十二歳を過ぎた時を一の標準として居ることは、見逃す可らざることであらう。

彌師訶將身施與惡(153—153)。前に「惡」字について、之を形の上から其の儘に讀めば、「臣」に當る則天文字であるが、かく見ては、意味を解し難いことを述べた。此の一節の意味は毗羅都思が彌師訶を殺す能はずといへるに對して、惡緣人等即ち馬太傳等にいふ祭司の長や長老等が重ねて請ふて、殺さなければならぬ(非レ不レ然不レ得)と主張し、彌師訶は身を將て□に施與し云々といふのであるから、之を字形の上から最も近い「惡」の誤と見れば前の惡緣人等に施與する義と解き得るが「臣」に施與したと讀んでは全く解し難いと思ふ。

枋處名爲訖句(165)。枋は集韻に據ると枋と同音で「相牽」の意味に於ては同様に用ひられる字である。枋はまた枋と同音同義に用ひられるが、枋には枋笞の義もあり、また標枋の義もある。思ふに枋處は枋處で、罪人を鞭ち責める場所か、若しくは罪あるものを曝し、標札を立て、衆人に示す場所の義であらう。馬太傳^{二七ノ} 馬可傳^{一五ノ} 等にはイエスを十字架に釘た場所の名をゴルゴタ(Golgotha)と記してゐる。こゝに訖句(Karlg. *yuet-ku)と